

プラトンの宇宙逆回転の神話（『政治家』268d5-274d8）における クロノスの治世の人々¹

早瀬 篤

1. はじめに

プラトンの『政治家（ポリティコス）』は、全体として、〈政治術〉（πολιτική）あるいは〈統治術〉（βασιλευτική）を定義することを目的とする対話篇である。対話を主導するのは「エレアからの客人」と呼ばれる哲学者であり、その対話相手となるのは有名なソクラテスと同名だが、彼とは別人の若いソクラテスである。この二人は知識全般を段階的に下位区分していくことで〈政治術〉を定義しようと試みるが²、その試みは対話篇の序盤で一度行き詰まりに陥ってしまう。そこでエレアからの客人は、その打開策として、一見したところ非常に風変わりな〈神話〉（μῦθος）を詳しく物語っていく（268d5-274d8）。本稿で私が取りあげるのは、一般にはあまり知られていないこの神話である。この神話の中核には、宇宙が「或るときには今それが回転している方向へと運動しているが、別のときには逆方向へと運動している」（270b7-8）という発想がある（ここで「宇宙」は、古代の宇宙観に準じて、その中心に地球があり、その回りを太陽や月や惑星が巡り、星座の貼りついた天球が宇宙の一番外側の境界を形成すると考えられている）。そこで、この神話を「宇宙逆回転の神話」と呼ぶことにしよう。

この神話のことはじめて聞いたという人は、宇宙が逆回転するなんて荒唐無稽だと反応するかもしれない。実のところ、エレアからの客人も、神話を出発点とする新たな探究に取り組むにあたって「ほとんど遊戯を混ぜ合わせるようにしてから」（268d8-9）話を進めねばならないと述べている。プラトン自身が神話の娯楽的側面を大いに自覚しているのだ。他方で、その言葉が「ほとんど」という制限を含むことから明らかなように、神話を提示するための真面目な意図も存在している³。そこでまず、この神話がふざ

¹ 本稿は、2025年3月26日に開催された日本基督教学会近畿支部シンポジウム（「分野横断型総合研究におけるキリスト教学の可能性」）において読み上げた原稿を改訂したものである。

² 二人は、対話篇『ソフィスト』において〈ソフィスト術〉を定義したときと同様に、知識全体を二つの下位の技術領域に分割し、そのうち〈政治術〉を含む技術領域をさらに下位の技術領域に分割するということを繰り返して〈政治術〉に到達しようと試みる。この手続きを首尾よく成し遂げる場合には〈政治術〉の定義が獲得されることになる。

³ Cf. e.g. Apelt (1914, 125 n.36); Rowe (1995, 186 ad 268d8). なお、真面目な意図とは、直接的には、対

け半分に語られるだけの荒唐無稽な話にすぎないという印象を軽減するために、この神話のプラトン著作集内部の位置づけ、先行思想との関係、そして後の思想への影響をごく簡単に確認しておきたい。

まず、プラトン著作集内部の位置づけを考えると、この宇宙逆回転の神話はプラトンの著作のなかで独立した話ではなく、多くの点において、西洋思想に深刻な影響を与えた『ティマイオス』の宇宙創造神話を下敷きにしている。例えば、全体的な宇宙観に関して、二つの神話は次のような共通点をもつことが指摘できる⁴。それはつまり、(1)この宇宙を製作するのは一柱の神であり、その神は「宇宙製作者」(デミウルゴス)および「父」と呼ばれること、(2)その神に従属する複数の神々がいて、私たちの世界に直接介入していること、(3)宇宙は無秩序に動く物的なものを素材にしてつくられたこと、(4)製作された宇宙は知性を持ち、魂をもつ生き物であること、である。ここからこの神話は、『ティマイオス』の宇宙創造神話を何らかの仕方で補完する役目を担っていると見做すこともできるだろう。

次に、初期ギリシア哲学との関連を考えると、『ティマイオス』の宇宙創造神話がアナクサゴラスの宇宙論を継承するのに対して⁵、この宇宙逆回転の神話は(直接の言及はないものの)エンペドクレスの宇宙論を継承すると見做せる⁶。エンペドクレスは〈愛〉と〈争い〉という二つの原理を考案し、これらが交互に支配的になることで宇宙は循環していると考えた。まず、〈愛〉が支配を強めていき、その過程で宇宙を構成する火・空気・水・土の四元素から大地や星々が生まれ、このとき大地からは動物たちが不完全な形で生まれでてくる⁷。この〈愛〉の支配が完成すると宇宙には完全な統合が実現し、そのとき宇宙はスパイロス(球)と呼ばれる。次に、今度は〈争い〉が支配を強めていくが、その過程で動物たちは相互に交配して子孫を残すようになる。この〈争い〉の支配が完成すると四元素のそれぞれは完全に離れ離れになり、それぞれがそれ自身の自然本来の

話篇冒頭の〈政治術〉の定義探究において〈羊飼ひ〉を手本にして政治家を〈人間の群れの養育者〉であると見做したことの誤りを示すことにある。プラトンは他の対話篇でも神話語りがたんなる遊戯を超えた役割をもつことを示唆することがある (cf. *Phdr.* 265c8–d1, *Phlb.* 30e6–7)。

⁴ 多くの学者たちがこのような共通点を指摘している。(1)については例えば *Plt.* 273b1–2 (τοῦ δημιουργοῦ καὶ πατρός) と *Ti.* 28a6 (ὁ δημιουργός), 37c7 (ὁ γεννήσας πατὴρ) を、(2)については *Plt.* 272d4–6 と *Ti.* 41a3–d3 を、(3)については *Plt.* 273b3–7 と *Ti.* 52d2–53a7 を、(4)については *Plt.* 269d1 と *Ti.* 36d8–37a2 を比較参照のこと。

⁵ アナクサゴラスは哲学史上はじめて〈知性〉による宇宙創造というアイデアを提示した。プラトンはこのアイデアを採用するが、アナクサゴラスの機械論的説明に不満を表明し、それを目的論的説明で置き換える。Cf. *Phd.* 97b8–99d3。

⁶ Cf. e.g. Diés (1935, xxxii–xxxiii); Skemp (2002 [1952], 90–91); Rowe (1995, 187 ad 269a7)。

⁷ エンペドクレスの宇宙の循環のどの段階で動物が生まれるのかは解釈が分かれるが、ここでは一般的な解釈に従う。Cf. Sedley (2007, 33–52)。

場所へと移動してしまう。その後で再び〈愛〉が支配を強めていく過程に進む。このような仕方ではエンペドクレスは循環する宇宙像を提示した。プラトンの宇宙逆回転の神話はこのエンペドクレスの宇宙像を利用しているのであり、宇宙的期間および動物の誕生の仕方において⁸、宇宙の一方方向への回転運動は〈愛〉の支配に対応し、逆方向への回転運動は〈争い〉の支配に対応しているのである。

最後に、後の時代への影響として、この神話が宇宙の永遠性をめぐる論争のなかで影響力を発揮してきたことも押さえておきたい⁹。この論争の発端は、アリストテレスが『天について』第1巻第10章において、宇宙は或る時点で神によって創造され、その後は永遠に存続すると考える論者たち——ここには間違いなくプラトンが含まれる——を批判して、すべての生成するものは消滅するのだと主張したことにある。後の時代において宇宙の永遠性は哲学者たちの大いなる関心を集める主題となるが、例えば医師として有名なガレノスは、『政治家』の宇宙逆回転の神話を援用しながら、神が宇宙を創造するだけでなく保全する役目も担うことによって宇宙の永遠性が保証されると議論している

(*Phil. Aet. Mun.* 601.4–14)。二世紀の中期プラトン主義者アッティコスも、対話篇の名前には言及しないものの、同じような議論を提示しており(断片 4, *des Places*)、少なくともこの主題においてこの神話が与えた影響力がはっきりと見て取れるのである。

さて、本稿で中心的に議論したいのは、この宇宙逆回転の神話のなかでクロノスの治世において生きていたとされる人々をプラトン(あるいはエレアからの客人¹⁰)がどのように評価するのかという問題である。古代ギリシアではクロノスの治世は「黄金時代」とも呼ばれて当時の人々の理想郷や楽園のシンボルとなっていたのであり、現代でそれは『創世記』におけるエデンの園などに比較されて西欧の楽園観を知るための手掛かりとされることがある¹¹。プラトンはこの神話の中でクロノスの治世を、我々の時代の直前の、宇宙が逆回転していた時期に同定する。そしてクロノスの治世の人々と我々の時代の人々のどちらがより幸福であるかという問いを投げかけるのである(272b1–d6)。このプラトンの問いの内実について学者たちの見解が分かれているが、多くの学者たち

⁸ それぞれの期間の長さについても一致が見られるかもしれない。Primavesi (2008, 253–255)は、近年再発見されたアリストテレスの著作への古注にもとづいてエンペドクレスの〈愛〉と〈争い〉の支配の期間がそれぞれ1万年であることを説明している。他方で、Campbell (1988 [1867], 61–62)がすでに指摘しているように、宇宙逆回転の神話では宇宙が一方方向に回転する期間は、人間の魂の生まれ変わりとの関連で説明されているが(*Plt.* 272d6–e3)、それは『パイドロス』の神話で人間が天上世界に戻るまでに生まれ変わりを繰り返す期間、すなわち1万年(*Phdr.* 248e5–249a5)に対応すると考えられる。

⁹ この点に関してはChiaradonna (2019, 331–338)を参照。

¹⁰ 私はエレアからの客人がプラトンの見解を代弁していると考えるので、本稿では両者の見解を区別しない。

¹¹ 藤縄 (1974, 196–208)を参照。

は、プラトンが実質的にクロノスの治世の人々に対して否定的評価を下していると主張する。それに対して私は、そのような解釈を棄却した上で、次のように提案したい。プラトンは、クロノスの治世の人々が或る真実在をめぐる哲学探究に従事していたならば現代の人々よりも幸福であるが、たらふく飲み食いし古喜劇のような物語に興じていたならば現代の人々よりも不幸であると判断する。そしてその人々がどちらの生活を送っていたのかは原則として開かれたままにしているが、実際には肯定的評価を支持しているのだ、と。

しかしこのことを詳しく議論するためには、最初に宇宙逆回転の神話の全体像を把握しておく必要があると思われる。そこで私は、まず次節においてこの神話の概要を説明し、第三節においてクロノスの治世の人々に対する評価をめぐる問題を詳しく論じるという手続きをとりたい。

2. 宇宙逆回転の神話の概要

さて、以下にこの神話の概要を示すにあたり最初に断っておきたいが、宇宙が回転する期間の理解に関して私は古代のプロクロスまで遡る伝統的解釈に従う。つまり、エレアからの客人は〈宇宙が現在とは逆方向へ回転している期間〉と〈宇宙が現在と同じ方向へ回転している期間〉という二つの期間をこの順で説明していると想定するのである。これに対して 20 世紀の終わり頃に幾人かの学者たちが、伝統的解釈を批判した上で、〈宇宙が逆回転している期間〉はごく短い期間であり、宇宙は基本的にずっと現在と同じ方向へ回転しているという新しい解釈を提示した¹²。しかしこの新しい解釈はすぐさま多くの批判を招き¹³、私の見るところでも十分な説得力をもつとは思われない。そこで、その新しい解釈を検討するのはまた別の機会に譲ることにして、今回は伝統的解釈に従った概要を、テキストの順序に沿って見ていくことにしたい。

① 断片的に語られる神話に関わる話 (268d5–269c3)

最初にエレアからの客人は、ギリシア神話に含まれる幾つかの話を取りあげる。それはつまり、(i)アトレウスとテュエステスが王位をめぐって争ったときに、ゼウスがアト

¹² Cf. Brisson (1995); Rowe (1995); Carone (2005, 124–144); Brisson et Pradeau (2003, esp. 41–45).

¹³ Cf. Lane (1998, 103–105); Ricken (2008, 132–135); Verlinsky (2008); Verlinsky (2009); El Murr (2014, 145–153). ただし私は、これらの批判に全面的に同意するわけでもない。とくに一部の学者は、プラトンがクロノスの治世の人々を肯定的に評価しているという理解が新しい解釈を動機づけたと考えて、その理解が誤りであると論じている。第三節で私はその議論を批判し、クロノスの治世の人々の評価に関しては肯定的に評価するほうが正しいと論じる。

レウスの王位継承を是認した証として太陽と星々の運行を逆回転させたという話、(ii)クロノスの治世の話、(iii)人々がかつて大地から生まれてきたという話である。そして彼はこれらすべてが或るひとつの事態を原因として語られるようになったと主張し、その事態をこれから明らかにすると予告する。なお、後の議論に関係するので、ここで(ii)に関して「クロノス神が支配したところの王位のことも私たちは多くの人たちから (πολλῶν) 聞いています」(269a7-8) と言われていることに注意しておきたい¹⁴。古代においてクロノスの治世の話は、ヘシオドスの『仕事と日』109-120の描写で広く知られていたが、ここでは明らかにそれ以外にも複数の出典が想定されているのである。

② 宇宙が逆回転することの論証 (269c4-270b2)

次にエレアからの客人は、諸前提にもとづく演繹によって宇宙が逆回転することを論証する。宇宙は神によって組み立てられ、思慮と多くの浄福なものを分けもつが、物性的性格も合わせもつために変化から無縁ではありえない。そこで、宇宙は、常に同じ運動をし続けることはできないものの、最大限に同じ運動を維持しようとする。ところで、すべての回転運動のなかで、それ以前の回転運動からの最小の逸脱になるのは、逆向きの回転運動である¹⁵。したがって、宇宙は或るときに逆回転するということが必然的に帰結するのである。この論証にもとづいて、宇宙は、或る期間は一方向へと神によって導かれながら回転しているが、残りの期間は神に放任されて、それとは「逆方向」へ自発的に回転しているのだと論じられる（ここでは神に導かれるときの回転方向を基準として「逆方向」と言われるが、これ以降では現在の我々の宇宙の回転方向を基準として「逆方向」と言われることに注意が必要である）。

③ 現在とは逆向きに回転するときに動物に起こる変化 (270b3-271c2)

次に、宇宙が現在とは逆向きに回転するときに動物に起こる変化が説明される。まず、宇宙が方向転換するまさにそのときにその内部で大災害が起こって多くの動物が死滅する。さらに、逆回転している全期間にわたって、動物の成長過程は見たところでは逆になる。つまり、もともと年老いて見えたものが、徐々に若々しい姿になり、さらに赤ん坊になり、最終的に消滅してしまうのである¹⁶。そして動物が誕生する過程も現在とは

¹⁴ Brisson et Pradeau (2003, 226 n.93)は πολλῶν を中性形にことって“beaucoup de récits”と訳す。その場合には出典が複数存在することはもっと明瞭になる。

¹⁵ 269e4-5は写本通り ὅτι μικροτάτην τῆς αὐτοῦ κινήσεως παράλλαξιν と読み、「それ自身の運動[= 回転運動]における[神の手を借りた運動からの]最小限の逸脱」という意味に理解する。

¹⁶ 宇宙の回転方向にかかわらず時間は同じように経過していくので、原文では「見たところではより老齢のもの」(τὸ γεραίτερον ἰδεῖν, 270d7-8) や「いわばより若いもの」(οἶον νεώτερον, 270e1) という言い方によって実際に加齢のプロセスと見た目の加齢のプロセスが区別される (cf. e.g. Apelt 1914,

まったく異なっており、動物は大地のなかに横たわる死体が復活することで、生まれながらに年老いた見た目をして誕生するのである。

④ 直前の逆回転していた期間（クロノスの治世）における生活（271c3-272b1）

次に、エレアからの客人は、我々の時代の直前の、宇宙が現在とは逆方向へ回転していた時期を「クロノスの治世」に同定した後で、そのときの動物の生活を描写する。それによると、このとき宇宙を製作した一柱の神が宇宙全体を管理し、他の神々がそれぞれの地域を分担管理していた。そして人間を含めたすべての動物たちは神霊たちによって放牧管理されており、そのため動物たちは互いに喰らいあうことも、戦争や内紛を起こすこともなかった。人間たちは前世の記憶をもたずに復活したので、もろもろの国制も、女子供の所有も存在しなかった。気候は裸のまま戸外で生活できるほど穏やかで、有り余るほどの食べ物が大地上から生えてきた、という。

⑤ クロノスの治世の人間と現在の人間のどちらが幸福かという問い（272b1-d6）

クロノスの治世における人々の生活が描写された後で、エレアからの客人はかなり唐突にクロノスの治世の人々と現在の人々とはどちらが幸福かという問いを投げかける。そして自ら条件付きの答えを提示する。神話のなかで脱線的に提示されるこの問いかけの内実については、次節で詳しく考察することにしたい。

⑥ 宇宙が神に放任されて現在と同じ方向へ回転するときの宇宙全体の状況（272d6-273e4）

次に、エレアからの客人は、宇宙が逆回転する期間が終わって神に放任された後に現在と同じ方向へ回転しはじめるときから、宇宙がその方向に回転する期間が終わってもう一度神が管理をはじめるまでの宇宙全体の様子を描写する。この期間、思慮を分け与えられた宇宙は神の教えをできるだけ想起しながら、独力で自分と自分のうちにあるものを世話する。そのことによって最初の頃こそはたくさんの善いものを生みだすのだが、徐々に神の教えを忘れていき、最後にはたくさんの悪いものを生みだして崩壊の危機に至る。そのときに神は再び宇宙の操舵席に戻り、宇宙の回転を方向転換させて立て直すのである。

126 n.42; Rowe 1995, 190 ad 270d7-9)。McCabe (2000, 143 n.12)は、このような理解を批判して、宇宙が逆回転しているときに動物は見た目だけ若返るのではなく、実際に若返るのだと主張する。しかしもしそうであれば、宇宙が逆回転するときには時間も逆向きに進む（つまり、時間がはじまりに戻る）のでなければならないはずである。テキストの記述はそうなっていないので（とくに 272d6-7 では「すべてのものの時間が終わる」ときに逆回転の期間が終わると述べられている）McCabe の解釈は受け入れられない。

⑦ 宇宙が現在と同じ方向に回転するときの動物の状況 (273e4-274d8)

最後に、エレアからの客人は、宇宙が現在と同じ方向に回転するときの動物の状況を説明する。それによると、逆回転のときの見たところ若くなっていくという動物の成長が止まって、動物は現在と同じ仕方でも成長・老化するようになる。そして動物は大地から生まれることができなくなって、互いに交配して子孫を残すようになる。それからまた、動物を管理していた神々がそこから離れると、動物はそれぞれの性格に応じて変化していき、その一部は野生化する。人間たちははじめ食料を入手する方法も獣たちから身を守る方法もたず困難に直面するが、神々が火や技術や作物の種を贈ったので、それらを利用して人間的生活を送れるようになった、という。

以上が、この宇宙逆回転の神話の概要である。

3. クロノスの治世の人々と現在の人々のどちらがより幸福かという問い

それでは、本稿の主題となる、プラトンは宇宙逆回転の神話のなかでクロノスの治世の人々をどのように評価するのかという問題に移ることにしよう。前節の概要で見たように、エレアからの客人は、神話を説明している只中で、かなり唐突にクロノスの治世の人々と現在の人々とではどちらが幸福かという問いを投げかける。このとき対話相手の若いソクラテスはこれに答えられず、エレアからの客人自身が次のように答えを提示している。

④ それでは、クロノスの養われ児たちは、人間たちだけでなく獣たちとも言葉を用いて親交を結べることに向けてそのようにたくさんの余暇と能力とをもっていたのですから、一方で、もしこの者たちがそれらすべてを哲学探究に向けて (*ἐπὶ φιλοσοφίαν*) 使用していたのであれば——つまり、獣たちとともにまたお互いとともに親睦を深めることによって、また「思慮の収集に関して、或るものが何らかの固有の能力をもつことで、他のものたちとは異なるものを知覚していた (*ᾗ ὁ βετο*) のかどうか」ということをあらゆる自然本性から聞き出すことによって、そうしていたというのであれば——幸福に関して今の人間たちよりもそのときの人間たちのほうが桁違いに優れていたのだと容易に裁定できますね。

⑤ 他方で、もし飽きるほどに食べ物と飲み物で満たされつつ、今もまさに彼らについて語られているような物語 (*μῦθους*) をお互いと獣たちとを相手に語り合っていた (*διελέγοντο*) のであれば、少なくとも私の信念に従って発言すると、このことも非常に容易に裁定できます。

いずれにしても、以上のことについては、もろもろの専門知識ともろもろの言葉の使用とに関して、どちらの仕方でもそのときの人たちが欲望をもっていたのかということを十分に解明してく

れる誰かが私たちのもとに現れるまでは、放っておくことにしましょう。(272b8-d4)

ここではクロノスの治世の人々の生活に④と⑤という二つの場合が想定されて、それぞれの場合について「判定が容易である」と述べられる。⑤の場合ではどのように判定されるのかがはっきりと述べられてはいないが（本稿の「結び」で述べるように、私はこれが意図的な婉曲表現だと考える）、クロノスの治世の人々は現在の人々よりも不幸であるという判定が言外に想定されているのは疑いえない¹⁷。なぜなら第一に、文脈的に⑤の場合の判定は④の場合の肯定的判定と対比されているために、否定的判定であると考えるのが自然であるし、第二に、プラトンは『ピレボス』において、飢えや渇きを癒やすことで得られる快楽は快苦の混じりあったものだと思わせ、生きるために必要なものを除いて、幸福な生きざまから除外するからだ（*Phlb.* 62d7-64a6, cf. *Rep.* IX 583b1-588a10）。そこで、ここで言われていることを額面どおりに受け止めるならば、クロノスの治世の人々は、④の場合には現在の人々よりも幸福であるのに対して、⑤の場合には現在の人々よりも不幸であると判定されるが、どちらの場合が事実なのかは分からない以上、その判定は保留されていると考えられるのである。

しかし興味深いことに、多くの学者たちが、我々はエレアからの客人の言葉を額面どおりに受け止めるべきではないと主張している。そして彼らは、この言葉の真意をむしろ次のように汲みとるべきだと主張するのだ。つまり、エレアからの客人は、実際には⑤の場合が成立していた——つまり、神々に世話をしてもらっていたクロノスの治世の人々は、飽きるほど飲み食いしに明け暮れて怠惰に過ごしていた——と考えていた。そして④の場合を述べたのは、たんに本来あるべき理想の状況を描写するためであるか、あるいは実際のクロノスの治世の人々の生活態度を皮肉のためなのである、と¹⁸。もしこれらの学者たちの解釈が正しいとすると、西洋哲学史上に深刻な影響を与えたプラトンは、きわめて悲観的な楽園観をもっていたということになるであろう。

では、どうして我々はこのような真意を汲みとるべきなのだろうか。この関連では、とくにエル・ミュールの研究（El Murr 2010）が示唆に富むので、ここでは彼の議論を確認しておきたい¹⁹。まず彼は、『政治家』という対話篇の劇中時代設定（ソクラテスが刑

¹⁷ 私の知る限りでは、⑤の場合でもクロノスの治世の人々のほうが現在の人々よりも幸福であると判定されていると解釈する論者はいない。しかしこの省略に違和感を感じる学者は存在する。実際、McCabe (1997, 105 n.50)は、そのような解釈を想定して、もしそうだとしたら、その判定は容易ではなく、条件付きのものになるはずだと反論している。

¹⁸ Cf. Nightingale (1996, 83-84); McCabe (1997, 105-111); McCabe (2000, 141-164); Ricken (2008, 122-123); El Murr (2010); El Murr (2014, 170-188). Betegh (2021, 89)も④の場合について「たぶん皮肉を込めて」言っていると述べている。

¹⁹ El Murr (2014, 170-188)も同様の立場から議論しているので、彼の立場を理解するために役立つが、

死する直前) よりも前に、ヘシオドスの『仕事と日』109-120 だけでなく、前 435-前 415 に上演された複数の古喜劇——これらは関連する断片がアテナイオス『食卓の賢人たち』第 6 巻 267e-270a に収録されている——が、クロノスの治世における「自発的に出来上がる生活」(αὐτόματος βίος) を描写していたことを指摘する²⁰。これらの古喜劇においてクロノスの治世は、馬鹿げているほどもので溢れたおめでたい場所として描写されている (286)。この事実にもとづいて、彼は次のように論じる。もし我々がヘシオドスの『仕事と日』と古喜劇の馬鹿げた描写を合わせて考えるならば、プラトンがこれらの描写を共感的に受け止めたはずはなかったという結論に到るだろう。そして上に引用したパッセージについては、人々が哲学探究に従事する⑧の場合はプラトン版の黄金時代に対応するのに対して、人々が飲み食いしに明け暮れる⑨の場合はヘシオドス版の黄金時代に対応するのである (292)。そして実際に、クロノスの治世における人々の生活様式はヘシオドス版の黄金時代に対応し、プラトンの意味での幸福な人々には相応しくない。なぜなら、そこで人間は神霊たちに飼育される動物にすぎず、女子供を所有しないことから社会性をもたないので、理性的に徳を身につけられないからである (294)。したがって、我々は⑧と⑨のどちらの場合が事実なのかは分からないというエレアからの客人の言葉を額面どおりに受け取ってはならない。彼は⑨の場合が事実だったと考えているのである。エル・ミュールは、おおよそこのように論じている。

このように、エレアからの客人がクロノスの治世の人々をどのように評価するのかということが解釈上の問題になっている。そこで、この問題を解決するために、私は以下において⑨の場合と⑧の場合の意味するところをこの順でより正確に突き止めることを目指したいと思う。そしてこのことによって私は、今挙げた多くの学者たちの見解とは逆に、プラトンが、原則的には⑧の場合と⑨の場合とのどちらが事実だったかは分からないという立場を表明しているものの、実際には⑧の場合を支持しているのだと結論づけることになるだろう。

3.1. ⑨の場合：クロノスの治世の人々は現在の人々より不幸である

最初に、⑨の場合について述べられていたことをもう一度確認しておこう。それは次のようなことだった。

そこでは以下に述べるような古喜劇を援用する議論は展開していない。

²⁰ このことは El Murr (2010) がはじめて指摘したわけではなく、それ以前から古代の黄金時代の研究においてヘシオドスとプラトンと古喜劇の記述はすでに相互に比較考察されている。例えば Baldry (1953) を参照。しかし私の知るかぎり『政治家』の研究においてこの事実を大々的に利用したのは El Murr (2010) が唯一のものである。Miller (2004 [1980], 43) も宇宙逆回転の神話を解釈するために古喜劇に言及するが、それを重要視してはいない。

- ① クロノスの治世の人々が、飽きるほどに食べ物と飲み物で満たされつつ、今もまさに彼らについて語られているような物語をお互いと獣たちとを相手に語り合っていたのであれば、現在の人々よりも不幸だったと容易に判定できる。

エル・ミュールはここにヘシオドスの描写と古喜劇の描写の両方を一緒くたにして読み込んでいた。これに対して私は、これら二つの描写の間には重要な相違があり、これらを「飲み食いしに明け暮れる人々」と総括するのは適切でないと考える。

それらの描写を実際に確認してみよう。まずは「飲み食いしに明け暮れる人々」という性格づけが適切だと思われる、古喜劇の描写から見ることにしよう。アテナイオスの『食卓の賢人たち』第6巻 267e-270a で上演年代順に引用される作品断片は²¹、時代が下るほど表現の仕方が大袈裟になっていくが、その描写の性格にはおおよその共通性が見られる。そこで、ここではクラテスの『獣たち』の断片の関連部分 (268e9-f8) とテレクレイデスの『隣保同盟の使節たち』の関連部分 (268b1-d3) だけを取りあげることにしたい。まず、クラテスの『獣たち』では、二人の話者の対話のなかで、クロノスの治世における諸道具への命令や食材との滑稽な対話が描写されている。

話者 A : それから、誰ひとりとして男奴隷も女奴隷も所有しようとはせずに、

むしろ老いた男が自分で自分に奉仕しようというのかい？

話者 B : まさか。だって、私はすべてのものを移動するものにするつもりだから。

話者 A : それがいったいそれらに何の役に立つというんだい。

話者 B : 人がこう呼びかけるときには、それぞれの道具が自分で進み出るのさ。

「食卓よ、そこへ直れ。自分で自分を準備しろ。小麦袋よ、捏ねよ。

お酌よ、注げ。盃はどこだ？行って自分を洗え。

大麦パンよ、そこに載れ。鍋はフダンソウ〔葉菜〕を吐き出してなければならなかったはず。魚よ、こっちへ来い」

「でも私はまだ片側しか焼けてませんよ」

「それなら自分をひっくり返してから油を塗って塩を振りかけろ」

²¹ これらの作品に関する情報はごくわずかであり、タイトルをどう訳すべきかも正確には分からないものが含まれる。暫定的な訳を与えて列挙すると、クラティノスの『ブルトスたち』、クラテスの『獣たち』、テレクレイデスの『隣保同盟の使節たち』、ペレクラテスの『採掘者たち』と『ペルシア人たち』、ニコポンの『セイレンたち』、メタゲネスの『トゥリオイのペルシア人たち』である。これらの作品の内容に関しては Baldry (1953) を参照。

ここで人間は奴隷の代わりに道具や食材に命令することで食卓を準備している。このクラテスの断片からは人間が飲み食いに明け暮れているかどうかまでは分からないが、テレクレイデスの『隣保同盟の使節たち』に目を移すと、その時代の人々の怠惰さの度合いを読み取ることができる。そこではクロノス神が人間たちに与える環境が次のように描写されている。

では、私が死すべき者たちに提供していた生活のことを最初から話すことにしよう。
まず最初に、平和はすべてのもののものだった。手洗水のように。
そして大地は恐怖をもたらすことも病気をもたらすこともなく、必要なものは自発的なものだった。
それはこういうことだ。
あらゆる溪流にはワインの水が流れていたし、大麦パンは、
もし少しでもお気に召すならどうぞ一番白いものを吞み込んでくださいと嘆願しながら、
人間たちの腹をめぐって小麦のパンと戦っていた。
魚たちは家路につきながら、自分たち自身をしっかりと焼いて、
もろもろの食卓の上に横たわっていたはずだ。
煮汁の川が熱い肉を転がしながら複数の寝椅子のそばを流れていた。
ディップソースの小川がそれを望む者たちのもとにあった。そういうわけで、
人が口に入るものを柔らかくなるまで湿らせて吞み込むのに有り余るものがあったのだ。
そしてもろもろの小鍋には香辛料が振りかけられた [原文破損] があつた。
焼きツグミの肉は、ミルクパンと一緒に喉へと飛び込んでいった。
平たいパンが顎のまわりで押しつぶされるときに勝ち鬨の声があがっていた。
子供たち²²は、豚コブクロの切れ端と肉の切り身でサイコロ遊びをしていた。
その当時の人間たちはぶくぶくと太っていて、巨人たちの大きな体軀をしていたのさ。

テレクレイデスが描写する人間たちは、寝椅子に横になったまま、自発的なご馳走——
食材が自らを調理してつくられ、勝手に口のなかに飛び込んでくるもの——をひたすら
味わうだけである。食べ物を道具にしてサイコロ遊びをする子供たちを除いては、彼ら
には自分から動いている気配さえ見られない。だからこそ、ぶくぶくと太っていたと述
べられるのだ。

以上の古喜劇の描写に対して、ヘシオドスが描写するクロノスの治世の人間たちは、
のんびりと気の向くままに活動するものの、何らかの仕事を行って、その成果を享受し
ていると読み取れるように思われる。該当箇所を引用しよう。

²² 268d2 oi παῖδες は「召使いたち」を意味するかもしれない。

すべての善いものが、彼らのものだった。穀物をもたらす耕作地は、自発的に
たくさんの惜しみない実りをもたらしていた。彼らは気の向くままに
のんびりと、多くの善いものと一緒に、畑仕事の成果を享受していた (ἐργ’ ἐνέμουντο)。

(116–119)

穀物が勝手に実る世界において人々が畑仕事をするというのは奇妙であるが、ヘシオドスの ἐργ’ ἐνέμουντο という表現は「畑仕事の成果を享受していた」という意味にとるのが自然である²³。だから、人々は耕作地を完全に放置しているのではなく、気の向くままにそれを管理していることになるだろう。さらに、ἐργαは「仕事」あるいは「仕事の成果」全般を指す言葉なので、ヘシオドス自身はそれを意図しないとしても、比喩的な表現として理解し、畑仕事以外の仕事の成果を——哲学探究の成果でさえも——享受していると読み込むことも可能だろう。いずれにせよ、ヘシオドスが描写する人間たちに対しては「飲み食いに明け暮れる人々」という性格づけが適切であるようには見えないのである²⁴。

それどころか、⑥の場合において古喜劇の人間描写だけが考えられていると見做すための重要な論拠がある。それは、ここでは「今もまさに彼らについて語られているような物語を…語り合っていた」という点が否定的評価を与える理由になっているが、古喜劇はまさしくそのような評価が与えられてしかるべき物語だと見做せることである。実のところ、この「物語」が何を指しているのかは解釈が分かれており、学者たちはヘシオドスの神話のことだろうとか、あるいは現にエレアからの客人が語っている神話のことだろうと提案している²⁵。しかしもしそうであるならば、なぜそのような神話語りが

²³ 例えば、West (1978, 181)は、同じ言葉が使われる『仕事と日』231 と『イリアス』第二歌 751 を参照させながら「畑を耕して生きる」(live off their fields) という訳を与えている(ただし彼はその後で「しかし耕作を含意する ἐργα は [自発的に食物が生えてくるという文脈に] 完全に相応しいわけではない」と注記しているが)。また Most (2018 [2006])は“they themselves ... shared out the fruits of their labors”と訳している。私はこのような解釈に従う。

²⁴ エル・ミュールのヘシオドス理解と対照的に、藤縄 (1974, 205–207)は、『創世記』2.15の「主なる神は人を連れて来て、エデンの園に住ませ、人がそこを耕し、守るようにされた」(新共同訳)という記述とヘシオドスの黄金時代の記述から「ヨーロッパ思想の出発点となったギリシア人やヘブライ人の理想郷は…軽い楽しい労働を含むという点に特徴があ[る]」と述べて、労働の要素がない仏教の極楽浄土と対比している。しかし古喜劇に見られる理想郷の描写が存在する以上、このような一般化は逆方向に極端になっているように見える。

²⁵ 例えば Rowe (1995, 194)は『アイソポス寓話集』に見られるような話、あるいはエレアからの客人がしているような話であると提案し、Ricken (2008, 123)はヘシオドスの神話、あるいはエレアからの客人がしているような話であると提案している。

否定的評価に繋がるのかを説明できないであろう²⁶。それに対して、この「物語」が古喜劇を指しているのであれば、説明は比較的容易である。すでに私は、『ピレボス』のなかで過剰な飲み食いに由来する快楽は快苦の交じり合ったものと見做されて、幸福な生きざまから除外されることに言及したが、その対話篇では喜劇を見て大笑いするときの快楽も快苦の交じり合ったものであることが示される (48a8–50a10)。そこでの分析によれば、喜劇のなかで提示される滑稽なものとは、無力な隣人が自分の知恵や容姿や財産に関して無知をさらけ出していること、すなわち無力な隣人の不幸なのである。そこで、我々が喜劇を見て大笑いするとき、我々は、無知な隣人の不幸を喜んでいることになるのだが、そのとき我々が感じている感情はプトノス——日本語でこの言葉の訳に相当するのは「人の不幸は蜜の味」という慣用句である——に他ならない。ところで、プトノスは苦痛を伴う感情である。したがって、我々が喜劇を見て大笑いするとき、我々は喜びと苦痛を同時に感じていることになる。そして『ピレボス』の議論によると、そのような快苦の混合状態は、過剰な飲み食いに由来するものと同様に、幸福な生きざまからは除外されなければならないのである。もちろん『ピレボス』で問題になるのは聴衆の側の感情であり、喜劇を制作し上演する作者たちの感情ではない。しかし⑥における「物語を語り合っていた」という表現は、語り手と聴衆とが交代することを含意している。だから、⑥において否定的評価を与える根拠となるのは、古喜劇のような物語を聞いて大笑いしていたことであると考えられるのである。そしてそのような物語を語ること、あるいは実際にそのような会話のやりとりをすること（例えば、上に引用したクラテスの断片における「魚よ、こっちへ来い」「でも私はまだ片側しか焼けてませんよ」「それなら自分をひっくり返してから油を塗って塩を振りかけろ」というやりとりをすること）は、古喜劇で描写されるクロノスの治世の人々にこそ相応しいと言えるだろう。

以上の二つの論点から、ヘシオドスと古喜劇とでは描写されるクロノスの治世の人々が明確に異なることが示せたと思う。⑥で否定的評価の根拠とされる「飲み食いに明け暮れる人々」という性格づけと「物語を語り合う」という行動は、古喜劇で描写されるクロノスの治世の人々に相応しいものである。それに対してヘシオドスの描写はきわめて簡潔であり、人々がどのように生活していたのかははっきりしない。彼らもやはり飲み食いと滑稽な話に現を抜かしていたのかもしれないし、真摯に畑仕事に打ち込んでいたのかもしれない。さらに私は、ヘシオドスの *ἐργα* を比喩的な表現として理解して、

²⁶ 確かに『国家』第2巻 377b4–379a4 でプラトンは、ホメロスとともにヘシオドスに対して、人間たちに多くの虚偽の物語を聞かせてきたと糾弾している。しかしこれは哲人王候補の教育という文脈に依存した特別な事例であり、プラトンの著作全体を考慮すると、プラトンはヘシオドスを概ね肯定的に評価していることが分かる。Most (2010, 66–67)は、プラトン著作におけるヘシオドスの引用を概観した後で、とくに『政治家』を含む後期著作においてプラトンの肯定的評価がはっきりと見て取れると述べている。

④の場合で話題になる哲学探究の成果を享受していると読み込むことさえ可能だろうと提案した。しかしもしそうであれば、その場合にどのような哲学探究が想定されているのかを説明する必要があるだろう。次にそれを考えることにしよう。

3.2. ④の場合：クロノスの治世の人々は現在の人々より幸福である

まずは、もう一度④の場合に関してテキストで述べられていたことを確認しておこう。それは次のようなものだった。

- ④ クロノスの治世の人々は、豊富な余暇と、動物と言葉を用いて交際する能力とをもっていたので、「思慮の収集に関して、或る動物が或る固有能力をもつことで、他の動物たちとは異なるものを知覚しているかどうか」をすべての動物から聞き取り調査しながら全力で哲学探究をしていたならば、現在の人々よりも遥かに幸福である。

エル・ミュールをはじめとする幾人かの学者たちは、クロノスの治世の人々は特殊な社会的条件に置かれているために、倫理的事項（正義）や（勇敢さ）などの徳あるいは（美しさ）をめぐる、プラトンの意味での通常の哲学探究を行えないので、④の場合は成立しえないと考える²⁷。しかし（本当に倫理的事項をめぐる哲学探究ができるかどうかはさておき）ここではそもそも「通常の哲学探究」が説明されているわけではないであろう。人間以外の動物たちと共同で行われる以上、ここでの哲学探究は現在の我々が行えるものでないことは明らかである。それでは、これは通常のものでないにせよ、何らかの仕方でプラトンの意味での哲学探究であると見做せるだろうか。私はそう見做せると考える。

まず、ここで直接の探究対象となるのは動物の「能力」（δύναμις）であり、その探究は感覚知覚の領域（五感で十分に把握できる領域）ではなく、思考の領域に帰属することを確認しておきたい。④で想定されているところでは、哲学探究者は、それぞれの動物に、その動物自身の固有の能力を用いて、思慮の収集に貢献する仕方で固有の対象

²⁷ 一部の学者たちは、クロノスの治世の人々は一生が逆向きに進むので記憶力をもたず、そのために哲学探究を行えないとも主張している (McCabe 1997, 107; McCabe 2000, 144; Ricken 2008, 123; El Murr 2014, 181)。しかし宇宙が逆回転しているときに時間が逆向きに進むと考えるのは誤りである (上記注 16 を参照)。さらに、記憶力をもたなければまともに会話すらできなくなってしまうので、④の場合はおろか、物語を語り合うことが想定される⑤の場合ですら成立しえないことになるであろう。

を知覚しているかどうかを聞き取り調査していくことになる²⁸。当然ながら、これは哲学探究である以上、知覚しているのか知覚していないのかを突き止めて終わりというのではなく、どんな能力によってどんな知覚対象を知覚しているのかを探究することになるであろう。このとき、まず、哲学探究者は、自分とは異なる動物の固有の知覚対象を自分では感覚知覚できない。さらに、その動物の固有の能力についても感覚知覚に依存した探究はできない。なぜなら、『国家』で述べられるように、「能力」というものは、或るものを別のものから区別するときの指標となる色や形のようなものをもたないので、それを特定するためには、何を対象とし、何を成し遂げるのかに着目する必要があるからだ (*Rep. V 477c1-d6*)。だから、ここで哲学探究者が目的とするのは、それぞれの動物に、その動物が固有にもつ能力が「何であるか」ということを、その知覚対象に着目しながら説明してもらうことであると言えるだろう。したがって、説明を通じて或る能力の「何であるか」を解明しようと目論む以上、ここで述べられる哲学探究は、感覚知覚の領域で行われるのではなく、思考の領域で行われることなのである²⁹。

次に押さえておきたいのは、プラトンにとって諸能力の哲学探究は、専門知識の発見・教育と結びつくことである。第一に、このことは（私の知るかぎりこれまで誰も指摘していないが）すでに引用されたパッセージのなかで確認できる。というのも、エレアからの客人は、④と⑤の場合を提示した直後に、その選択肢を「もろもろの専門知識ともろもろの言葉の使用とに関して (*περί τε ἐπιστημῶν καὶ τῆς τῶν λόγων χρήας*)」、どちらの仕方ですのときの人たちが欲望をもっていたのか」(272d3-4)と言い換えているからである。このうち「もろもろの言葉の使用」のほうは、④と⑤の両方の場合に当てはまるが、それぞれ異なる意味をもつ。つまり、④の場合は「固有の能力を説明すること」であり、⑤の場合は「古喜劇を物語ること」である。しかし「もろもろの専門知識」のほうは、⑤の場合には当てはまらないであろう³⁰。だから、これはとくに④の場合について言われていると考えられる。したがって、ここで、思慮の収集に関わる動物の固有能力の哲学探究は何らかの専門知識に結びつく想定されていることが分かるだろう。第二に、

²⁸ ④の場合に関連して「知覚している」と訳されたのは動詞 *αἰσθάνομαι* の変化形である (*ᾔσθετο*, 272c4)。もちろんこの言葉はたいいてい五感で事物を知覚することを意味するが、広く、信念や知性によって事物を把握することも意味する。ここではそれぞれの動物の固有の知覚対象が問題になっているので、多くの動物に共通の「五感で事物を知覚すること」を意味しないことが明らかである。

²⁹ プラトンは、ここに述べたような感覚知覚の領域（多くの *F* であるものの領域）と思考の領域（*F* さの形相の領域）の区別を基礎として、哲学的問答法は後者の領域で行われると考えたというのが私の見解である。もちろんこの点は激しい論争的であり、学者たちの同意は成立していない。私の見解については、早瀬 (2021) を参照してほしい。

³⁰ もちろん喜劇製作術は専門知識であるが、⑤の場合は明らかにそのような専門知識を追求することは想定されていない。

『パイドロス』では「能力」に関わる哲学探究は「専門知識」の発見・教育に結びつくということが一般的に説明されている。つまり、或る専門知識・技術を発見・教育しようとする人は、その専門知識・技術の対象を諸形相へと分割した上で、それぞれの形相をその能力 (δύναμις) において特定しなければならないと述べられるのだ (Phdr. 270c10–d7)。このときその人は、対象に含まれるそれぞれの形相について「行うことに関して、何に対してどんな能力 (δύναμις) を本来もつものであるのか、あるいは作用を受けることに関しては、何によってどのような能力 (δύναμις) を本来もつものであるのか、ということ」を考察しなければならない (Phdr. 270d3–5)。したがって、プラトンによれば、一般的に、或る対象領域に含まれるそれぞれの能力を特定することによって、その当の対象領域に関わる専門知識の発見・教育が成し遂げられるのだが、②の場合では、その特定の事例として、それぞれの動物が固有にもつ能力を哲学的に探究することによって、或る対象領域に関わる専門知識の発見・教育が成し遂げられるのである。

それでは、②の場合においてどんな対象領域に関わる専門知識が問題となりうるだろうか。この問いに対する答えはもはや思弁的になってしまうが、私はそれが〈生き物〉の全体を対象とする専門知識だと提案したい。プラトンにとって或る哲学探究の最終目標は、思考領域におけるその探究対象——すなわち或る可知的なもの (νοητόν) ——をそれ自体で把握することである。例えば、『饗宴』のソクラテスのスピーチのなかでは、〈美しさ〉をめぐる哲学探究の最終目標は「本性において驚くべき或る種の〈美しさ〉を目にすること」(Smp. 210e4–5)であり、それは「それ自体で、それ自体とともに、常に単一の相をもつものとして」(ibid. 211b1–2) 現れると言われる。そしてこのような探究で最終的にそれ自体で把握される対象は、我々の世界を超越したものであると見做され、「真実在」(τὸ ὄντως ὄν) と呼ばれる (cf. e.g. Rep. VII 490b5; Phdr. 247c7; Phlb. 59d4; Ti. 52c5)。ところで、プラトンは『ティマイオス』において②の場合の探究目標に相応しいと思われる真実在について説明している。それは〈生き物〉の真実在である。これは神が我々の宇宙を製作するときにモデルとして利用したものであり、個々の可知的な動物たち (νοητὰ ζῷα) をそれ自身のうちに包みもつとされる (Ti. 30c2–31a1)。もちろん現代の我々にもこの〈生き物〉の真実在を最終的に把握することになる専門知識が存在するのであって、それは生物学に相当するだろう。しかしクロノスの治世の人々は、動物と直接言葉を交わせるという利点を活かして、我々には不可能な仕方、それぞれの動物の固有能力に関する哲学探究を遂行できると想定されているのだ。そしてそれぞれの動物の固有能力を把握することは、それらを包括する生き物全体の理解に繋がるであろう。だから、もしクロノスの治世の人々がその哲学探究に従事しているのならば、彼らもまた〈生き物〉の真実在を最終的に把握することになる専門知識の発見・獲得に従事していると思えるのである。

以上の議論にもとづいて私は、クロノスの治世の人々が哲学探究に従事するのならば、

プラトンが他の多くの著作で論じているような倫理的事項を対象とする通常の哲学探究ではなくて、〈生き物〉を対象とする哲学探究に従事しているのだと提案したい。そしてこの哲学探究は、有り余る余暇をもち、動物たちと言葉を用いて親交を結べるという利点を活かして行われるとされている。したがって、仮に、一部の学者が主張するように、クロノスの治世の人々が、特殊な社会的条件に置かれているために通常の哲学探究を行えないということが事実であるとしても、㉔の場合が成立しないということにはならないのである³¹。そして私が提案したように、もしこの哲学探究の最終目標が〈生き物〉の真実在を把握することにあるのならば、ちょうど『饗宴』において〈美しさ〉の真実在を把握した人は、似像ではなく真実に触れているので、真実の諸徳を生みだし、幸福になると述べられているように (cf. *Smp.* 211d8–212a7)、クロノスの治世の人々も、宇宙の神的なモデルとなる〈生き物〉の真実在を把握することによって幸福になると言うてよいと思われるのである。

4. むすび

これまでの議論から、クロノスの治世の人々が現代の人々よりも幸福かどうかを問う箇所では正確にはどのようなことが言われているのかを明らかにできたと思う。つまり、それらの人々は、㉔もし有り余る時間と動物と会話できる能力とを有効活用して、それぞれの動物がもつ固有の能力の「何であるか」を探究し、全力を尽くして〈生き物〉全体を対象とする専門知識の確立に努めていたのであれば、現代の人々よりも幸福なのだが、㉕もし飲み食いしに明け暮れて古喜劇のような物語を互いに語り合っていたのであれば、現代の人々よりも不幸である、ということだ。そしてこう理解したときに㉔がたんなる理想や皮肉を述べていると考えるべき根拠は存在しないので、我々はどちらが事実かを解明してくれる人が現れるまでこの判定は保留されるというエリアからの客人の言葉を額面どおりに受け取るべきである。

しかし私には、エリアからの客人が、判定を保留しながらも、実際には多くの学者が考えた㉕の場合ではなく、むしろ㉔の場合が事実だったと示唆しているように思われる。

³¹ クロノスの治世の人々が、神々に直接管理されながらも、倫理的事項をめぐる通常の哲学探究を行えるのかどうかは、テキストに何も書かれていないので分からないとしか言えないと思う。参考までに、『クラテュロス』ではハデス神が、死んで魂だけになって彼のもとにやって来た人々を、徳をめぐる欲望によって縛りつけると述べられることを指摘しておきたい (*Cra.* 404a3–4)。クロノスの治世の人々も現代の我々とはやはり違う仕方でも徳をめぐる探究に導かれるという可能性は残されるだろう。

その理由は二つある。ひとつ目は、〈政治術〉の定義のためにこの神話が貢献することに関わっている。それはつまり、〈人間の面倒見術〉には二つの種類が存在し、その一方は人間の政治家がもつ〈人間の^{人間}的面倒見術〉であるが、他方はクロノスの治世の神々がもつ〈人間の^神的面倒見術〉であると判明することだ (267d5-6, cf. 275b1-7)。ところで、プラトンは、幾つかの箇所では〈面倒見術〉 (ἐπιμέλεια, ἐπιμελητική) あるいはそれと交換可能な〈世話術〉 (θεραπεία, θεραπευτική) をもつ人は³²、それを行行使することで、世話されるものをより善いものにする³³と述べている。このことは『政治家』内部でも示唆されているが (293b1-c3)、とくに明らかなのは『エウテュブロン』の次の箇所である。

それではともかくあらゆる〈世話術〉 (θεραπεία) は同じことを成し遂げるのでしょうか。それは次のようなことです。つまり、それは世話されるものの何らかの善いことと恩恵に向けられているということです。ちょうど馬たちが〈乗馬術〉によって世話されて恩恵を受けてより善いものになるのをあなたがまさしく目にするように。(13b7-10)

そこで、クロノスの治世の神々は〈人間の^神的面倒見術〉をもつとされる以上、それを行行使することで、人間たちをより善いものにするのでなければならない。もし⑥の場合のようにクロノスの治世の人々が不幸であるとしたら、そのときの神々はそもそも〈人間の^神的面倒見術〉をもたないことになってしまうだろう。だから、クロノスの治世の神々がもつ技術は、⑥の場合ではなく④の場合が成立していたことを示唆するのである。そして二つ目の理由は、⑥の場合ではクロノスの治世の人々が「不幸である」とははっきりと言われないことだ。もちろんプラトンは文脈から明らかと考えて省略しただけかもしれないが、ここに違和感を感じる学者も存在する³⁴。そこで、私はこれが婉曲表現になっていると提案したい。つまり、エレアからの客人は、神々に面倒を見てもらいながら神々と一緒に生活している人々³⁴に対して「不幸である」と虚言を吐くのは恐れ多いと考えて、その言葉を省略したのである³⁵。これらの理由から、エレアからの客人はむしろ④の場合を支持していたと考えられるのだ。

最後に、これまでの議論を通じて得られる、古代ギリシアにおける楽園観を概括して本稿の締めくくりとしたい。古代ギリシアにおける楽園観は一枚岩ではなく、ヘシオド

³² 〈面倒見術〉と〈世話術〉とが交換可能であることについては、とくに 275e6-7 を参照。

³³ 注 17 を参照。

³⁴ 『ピレボス』 16c7-8 では「古の人々は我々よりも優れており、神々のもっと近くに住んでいた」と言われる。

³⁵ プラトンが神への恐れから婉曲表現を用いてははっきりと言わない場合については *Ti.* 29a3-5 に類例がある。ただしそこでは「もし口にする³⁵ことさえ憚られることが事実であれば」という仕方で婉曲表現であることがはっきりと示されている。

スのもの、古喜劇のもの、プラトンのものは互いに異なっている。ヘシオドスの楽園では、人々は基本的に大地から自発的に生えてくる飲食物を享受しているが、同時に気の向くままに仕事をしながら生活している。古喜劇の楽園では、人々はひたすら飲み食いに明け暮れるだけでなく、喜劇のような物語を披露し合って大笑いしながら生活している。そしてプラトンの楽園では、人々は動物たちの固有の能力を調査して、〈生き物〉の真実在を把握することを目指して全力で哲学探究に打ち込んでいるのである³⁶。

文献表³⁷

- Apelt, Otto. 1914. *Platons Dialog: Politikos oder Vom Staatsmann*. Leipzig: Verlag von Felix Meiner.
- Baldry, H. C. 1953. "The Idler's Paradise in Attic Comedy." *Greece & Rome* 22: 49–60.
- Betegh, Gábor. 2021. "The Myth and What it Achieves." In *Plato's Statesman: A Philosophical Discussion*, edited by Panos Dimas, Melissa Lane, and Susan Sauvé Meyer, 71–93. Oxford: Oxford University Press.
- Brisson, Luc. 1995. "Interprétation du mythe du Politique." In *Reading the Statesman*, edited by Christopher J. Rowe, 349–363. Sankt Augustin: Akademie Verlag.
- Brisson, Luc, et Jean-François Pradeau. 2003. *Platon: le Politique*. Paris: GF Flammarion.
- Campbell, Lewis. 1988 [1867]. *The Sophistes and Politicus of Plato*. New Hampshire: Ayer Company, Publishers, Inc.
- Carone, Gabriela Roxana. 2005. *Plato's Cosmology and Its Ethical Dimensions*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Chiaradonna, Riccardo. 2019. "Galen and Middle Platonists on Dialectic and Knowledge." In *Dialectic After Plato and Aristotle*, edited by Bénatouïl, Thomas, and Katerina Ierodiakonou, 320–349. Cambridge: Cambridge University Press.
- Diès, Auguste. 1935. *Platon, œuvres complètes tome IX Ire partie, le Politique*. Paris: Les belles lettres.

³⁶ 本稿のとくにヘシオドスに関わる部分に関して、中務哲郎先生から詳しいコメントをいただきました。ここに感謝を記したいと思います。本研究は JSPS 科研費 JP24K03330 の助成を受けたものです。

³⁷ 引用されている文献が初出でない場合は、初出の年を角括弧で補足する。

- El Murr, Dimitri. 2010. "Hesiod, Plato, and the Golden Age: Hesiodic Motifs in the Myth of *the Politicus*." In *Plato and Hesiod*, edited by G. R. Boys-Stones and J. H. Haubold, 276–297. Oxford: Oxford University Press.
- . 2014. *Savoir et gouverner: essai sur la science politique platonicienne*. Paris: Librairie philosophique J. Vrin.
- Lane, Melissa. 1998. *Method and Politics in Plato's Statesman*. Cambridge: Cambridge University Press.
- McCabe, Mary Margaret. 1997. "Chaos and Control: Reading Plato's *Politicus*." *Phronesis* 47: 94–117.
- . 2000. *Plato and His Predecessors: The Dramatisation of Reason*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Miller, Mitchell. 2004 [1980]. *The Philosopher in Plato's Statesman*. Las Vegas: Parmenides Publishing.
- Most, Glenn W. 2010. "Plato's Hesiod: An Acquired Taste?" In *Plato and Hesiod*, edited by G. R. Boys-Stones and J. H. Haubold, 52–67. Oxford: Oxford University Press.
- . 2018 [2006]. *Hesiod: Theogony, Works and Days, Testimonia* (Loeb Classical Library). Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.
- Nightingale, Andrea Wilson. 1996. "The *Statesman* Myth Reconsidered." *Ancient Philosophy* 16: 65–92.
- Primavesi, Oliver. 2008. "Empedocles: Physical and Mythical Divinity." In *The Oxford Handbook of Presocratic Philosophy*, edited by Patricia Curd and Daniel W. Graham, 250–283. Oxford: Oxford University Press.
- Ricken, Friedo. 2008. *Platon: Politikos*. Göttingen; Vandenhoeck & Ruprecht GmbH & Co.
- Rowe, C. J. 1995. *Plato: Statesman*. Warminster: Aris & Phillips Ltd.
- Sedley, David. 2007. *Creationism and Its Critics in Antiquity*. Berkeley: University of California Press.
- Skemp, J. B. 2002 [1952]. *Plato: The Statesman*, 2nd ed. Bristol: Bristol Classical Press.
- Verlinsky, Alexander. 2008. "The Cosmic Cycle in the *Statesman* Myth I." *Hyperboreus* 14: 57–86.
- . 2009. "The Cosmic Cycle in the *Statesman* Myth II." *Hyperboreus* 15: 221–250.
- West, M. L. 1978. *Hesiod: Works & Days*. Oxford: Clarendon Press.
- 早瀬 篤 2021. 「三本の指の例が示すこと（『国家』522e5–524d5）」『古代哲学研究 METHODOS』53: 1–30.
- 藤縄謙三 1974. 『ギリシア文化と日本文化』東京：角川書店.